現代に生きる世界遺産
～ウエストミンスター寺院②

藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

日本はアジアの島国、イギリスはヨーロッパの島国、日本の皇室に対しイギリスの王室。何か似た環境にあり、イギリスに親近感を持つ。意外だったのは、イギリスの国土が日本の五分の三の広さしかないこと。これは、私の頭の中に世界各地に植民地を持っていた大英帝国時代の残影があったからかもしれない。

今回訪れたウエストミンスター寺院は世界遺産。世界遺産の数はイギリスの方が断然多い。日本の十七に対し二十九。特に文化遺産が多いのが目立つ。世界遺産は文化遺産、自然遺産、複合遺産の三つからなるが、日本の文化遺産が十三であるのに対し、イギリスには二十四ある。このうちウエストミンスター寺院をはじめ四つがロンドン市内にあり、日常に使用されている。

世界遺産といえば、過去のものと思いがちだ。しかしイギリスの世界文化遺産、とりわけウエストミンスター寺院は今も身近な存在である。

その思いを強くしたのは「二十世紀の殉教者像」の存在を知ってからだ。

ウエストミンスター寺院は上から見ると十字架の形をしており、十字架の縦の一番上の部分に「聖母の礼拝堂」があり、一番下の部分が掲載写真の西側正面になる。教会建築で建物の正面デザインを「ファザード」と呼び、建物の顔の役目を果たすが、ウエストミンスター寺院はこの西側正面部分がファザードである。

王室関係者はここから出入りするが、一般の礼拝者は十字架でいえば横棒の左側部分（北出入り口）から入場し、西側正面から出る。

私も北口から入って礼拝に参加し、西側正面口から建物の外に出た。アーチ型の出入り口を出た所で振り返ると、すぐ上の壁の部分にある彫刻像が目に入った。その時はほかの教会のファザードで見かけるイエスの十二使徒像と同じだろうと思っていた。

しかしあとで買い求めた日本語のガイドブックで、これが「二十世紀の十人のキリスト者の殉教者像」と知る。

アウシュビッツで他人の身代わりになって殺されたカトリックのコルベ神父、暗殺された黒人解放運動で有名なキング牧師、ロシア革命で殺されたロシア正教会のエリザベート妃など、イギリス国教会には直接関係のない世界の十人の殉教者の彫刻像がファザードにあるのに驚いた。

理由は書かれてなかったが、宗派を超えて、弱者のため、社会正義のために殉教した人を、一九九八年に世界遺産の中に刻したウエストミンスター寺院のあり方に共鳴する。

科学や技術が進歩して何かとスピーディーな現代社会は過去を軽視する傾向があるが、我々は過去の歴史の上に生きており、そこから学ぶことは多い。

ウエストミンスター寺院の西側正面